

30代教師の転

起

きる！

失敗やつまずきを転機に、授業力を高める！



全員の興味を引き出すために 生徒の実態に応じた指導を追究

私が乗り越えてきたもの

難関大の入試問題が解けなかった私

大学卒業後の数年間、常勤講師として福岡県内のさまざまな公立高校で教壇に立ちました。毎年のように勤務校が変わりましたが、私はどの高校でも同じことを心掛けた。それは、生徒の日常と生物の知識をつなぐこと

です。ニキビの原因など、生徒に身近な例を挙げたり、実物の植物に触れさせたりすることで、生徒が生物に興味を持つ授業を目指しました。実際、多くの生徒が関心を示してくれました。

しかし、進学校で初めて3年生を担当した時に、思わぬことでつまづきます。ある日、生徒が質問に持ってきた

ある難関大の入試問題を、私は解けなかったのです。思わず絶句してしまいました。その場は生徒を帰すしかありません。せっかく私を信頼して来てくれたのに申し訳ないと、情けない気持ちでいっぱいになりました。

視線を向けてくれない生徒がいる

教師としての準備不足を痛感した私は、多くの難関大の入試問題を解きました。「生徒からの信頼に応えたい」と必死でした。志望者が多い九州の国立大は出題傾向も分析し、その結果を授業で示すようにしたところ、生徒は

多様な生徒の学力に応じた説明が出来なかった

以前にも増して生き生きと授業を聞くようになりました。入試問題と向き合ったかいがあったと思いました。

28歳で私立大牟田中学・高校に採用された私は、ここでも生徒の関心を生物に向けようと意気込みました。しかし、生徒の視線は思うようには集まりませんでした。導入部分の雑談を交えた説明では全員の視線を感じるのですが、本論の説明を始めると何人かの視線が離れていくのを感じました。私の担当クラスは学力幅がとても大きかったため、一つの学力層の生徒を注目させられても、他の層の生徒までは引き込めなかったのです。何を話題にしても、誰かがつまらなそうな表情をする。そんな授業になっていました。



そのだ・なおし ◎教職歴14年。同校に赴任して9年目。担当教科は生物。1・2・3学年担当。福岡県・私立大牟田中学・高校 ◎全日制/普通科・総合学科・工業科・調理科/共学。12年度入試では、国公立大は九州大、筑波大、神戸大、熊本大、長崎大、佐賀大などに計28人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、立命館大などに延べ176人が合格。

福岡県・私立大牟田中学・高校

園田直嗣先生

36歳

そして、これからも挑み続ける目標

生徒全員を引き付けるために

どうすれば生徒誰もが意欲的に参加する授業に出来るのか。このことを考えた末に取った方法が、基礎的な内容を違う表現で3回話すというものです。まず中位層向けに教科書に沿った説明をし、次に下位層にも分かる身近な例を提示して説明。そして上位層には、知的好奇心を刺激するような時事問題や入試問題を絡めた説明をしたのです。上位層向けの説明を聞くことで、中下位層の生徒も「自分も頑張ろう」と奮起してほしいと期待しました。

授業進度を守るために徐々に説明を進めても、その数は減りません。基本をしつかり押さえられたからだと思えます。授業アンケートでは「生物が好きになった」という声が多くなりました。私が出す演習課題に加え、自分で問題集を買って解くほど意欲的な生徒も現れ、私は教師冥利に尽きる思いでした。ところが、大牟田中学・高校に来て5、6年が経った頃、私は改めて指導を見直すことになりました。既習の知識で十分に答えられる内容を問い掛ければ、以前はどの生徒も何らかの意見を言ってくれましたが、この頃からすぐに「分かりません」と答える生徒が目立ち始めたのです。理由を考えようと

せず、正解ばかりを求めていることは明らかでした。学習に対する生徒の意識が変わってきていると思えました。そうであれば、私も生徒の変化に応じて指導を変えなければなりません。

考える面白さを伝えたい

答えだけでなく、答えを導くプロセスにも興味を持たせたい。そう思った私はまず、発問内容を変え、常に理由を考えさせるようにしました。「サクランボのならない桜は、どうして子孫を残せるのだと思う？」などと、生徒の日常に引き付けた例も更に増やしました。また、教科書の記述は、研究者の「なぜ？」という疑問から始まり、多くの実験や観察を経て得られた結果

だと伝えることで、理由を追求する魅力を示そうとしました。

こうした指導の成果は、生徒の表情に表れました。私の問い掛けに、どの生徒も真剣に、そして楽しそうに考えるようになったのです。生徒の答えも射たものが増えています。最近ようやく、考える面白さを伝えられてきたと実感できるようになりました。

生物という学問の魅力を更に伝えるためには、私自身も学習し続けなければなりません。今でも毎週のように、大学主催の勉強会や研修会、問題集作りに参加しています。こうして学習し続けてこそ、最先端の知識を得ることができ、教員としての深みや人間的な魅力が生まれてくると考えています。

生徒に生物という学問の魅力を伝えていきたい



園田先生 の 授業実践

Q&A

Q 生物に対する生徒の関心を引き出すために、授業でどのような工夫をしていますか？

A 毎回の授業の冒頭5分間は、教科書は開かず、その日の授業内容に関連する話をする時間にしています。例えば、遺伝や免疫の単元では血液型が出てくるので、「血液型性格占いに科学的根拠はあるか?」といった話をしたことがあります。

生徒が関心を持つ話が出るよう、月1回ほどのペースで、生徒から質問を募っています。B5判のプリントを配布し、生徒はそれに私に対する質問を書いて提出するのです。生徒がどのようなことを考えているかを知る機会になるため、この質問プリントは、私と生徒とのコミュニケーション・ツールであるとも言えます。

たくさん質問してもらえるよう、生徒には、内容は生物に限らず、興味のあることなら何を書いてもよいと伝えています。生物とは直接関係がないように思える質問でも、生物の知識で説明できるものは授業で積極的に取り上げます。

質問の答えは、私が説明するだけでなく、生徒に問い掛けることもありますから、知識を活用する練習にもなっていると思います。

Q 知識を定着させるために、指導でどのような工夫をしていますか？

A センター試験と同じ難易度の選択式の問題を2~3問載せた復習プリントを、毎回の授業で配布しています。以前はもう少し多くの演習問題を解かせていましたが、他教科との学習バランスを考えた結果、今の分量に落ち着きました。

メッセージをお寄せください

◎更なる授業力の向上を目指す園田直嗣先生へメッセージをお願いします。同じ課題を抱えている同世代の先生の共感の言葉、独自の授業スタイルを確立された先輩からの応援やアドバイスなどを自由にお寄せください。編集部より、園田先生へお届けします。

下記のe-mailアドレスに
メッセージを送信ください

view21_since-1975@mail.benesse.co.jp